

タヌキ



丘にタヌキが棲んでいるとうわさで聞いていたが、土壁に使う竹を切っていると、三匹のタヌキと出会った。(2009年11月5日)

猫



京芸のキャンパス内にはたくさん猫がいる。つちのいえの作業小屋もときどき荒らされる。土を塗り立ての4号壁のカウンターの上に、くつきりと足跡が残っていた。(2012年11月28日)

エントツドロバチ



屋根を茅葺きにしてから、4～5月にハチが大量に発生するようになった。あるとき、エントツドロバチがつちのいえの壁土を舐めて土を丸めているのを見つけた。その土を集めて、毎年、プレーカーボックスの中に土の管でできた有機的な形状の巣をつくる。人とハチが同じ材料を使ってつちのいえをつくっている。

つちのいえの 生きものたち

つちのいえの丘はとても自然が豊かだ。季節に応じて多様な生きものたちが生命を謳歌する。参加者はみな自然や生きものが大好きだ。



猿

屋前、ひとりで屋根の天辺に上って竹を編み下がりしていると、猿が足場の上にあった。猿に下から見上げられ、目が合った。だが作業途中だったので忙しく、相手にしなかった。まもなく悠然と野外ステージの方へ降りていった。西山にはたくさん猿がいるが、つちのいえの丘は、猿にとっては西山の一部なのだ。(2010年12月9日)

ニホントカゲ



新年会で、フネの残土の中で冬眠していたトカゲを起こしてしまう。艶やかなニホントカゲだった。(2014年1月9日)

カタツムリ

梅雨の前後には、丘のあちこちにカタツムリが出没する。
小さいのもかわいいが、やっぱり堂々とした大きいのは、姿も動きも優雅だ。
(2018年6月21日)



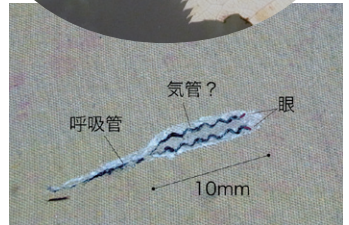
ナナフシ



つちのいえの回りにはナナフシが多い。じつと木の枝や草に擬態するところが人気だ。擬態といっても体色は変わらない。緑色だけでなく、茶色のナナフシもいる。

オナガウジ

水場の桶の中に、多数のボウフラといっしょに、体内が透き通り、伸縮する尾をもった奇妙な生物を多数発見。オナガウジと呼ばれるハナアブの幼虫。ハナアブはハエの一種なので、幼虫もウジと言われてしまう。かたちと動きが面白く、吸い込まれるように見える。カンヴァス屋根にも描いた。
(2012年6月7日)



オオミスジ コウガイビル



ムカデ

ムカデにはよく悩まされる。土囊から赤土を出すと、ムカデの母親がたくさんの赤ちゃんをかかえて丸まっていた。初めて見る光景に一同騒然。でも母親はなんだか元気がない。そっと草陰に移した。
(2011年7月28日)



ブルーシートの下に、50cm以上ある長いヒルをみつけた。よく見ると、半月形の頭部、三本の黒い筋、きわめてゆっくりした動き。環形動物のヒルとは別種で、プラナリアなど同種の扁形動物のオオミスジコウガイビルか。頭部の形が女性の髪飾りの弁(こうがい)に似ている。コウガイビルは通常のヒルに比べて筋肉や神経系が発達せず、ゆるゆると這うだけ。雌雄同体でミミズやナメクジを食べるが、乾燥にはナメクジ以上に弱い。プラナリア同様に再生能力が高く、切られた部分はのちに再生する。(2015年7月2日)

植物観察会

植生地理学から読み解く丘の現状

2015/7/9 15:00~

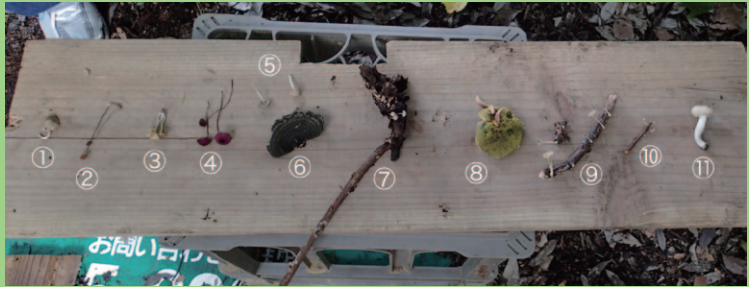


2014/6/4

1_丘で一番多いシラカシの木。ブナ科の常緑樹で、暗い場所でも大きく枝を広げて成長する陰樹。固くて強靱なので、工具の柄や建材に適する。

つちのいえの丘は、芸術創作と自然研究が交わり合える豊かな環境資源だ。現代生物学の徳岡駒子先生がたびたび授業で丘を利用されていることを知り、植物観察会をお願いしたところ快諾下さり、多くの参加者と共に実現の運びとなった。

徳岡先生はきのこの専門家だが、この日は植生地理学の観点から、丘のさまざまな樹木やキノコについて教えていただいた。



(1) ナヨタケの仲間 (2) ハリガネオチバタケ (3) 不明確 (4) ハナオチバタケ (5) ナヨタケの仲間
(6) カワラタケ (7) 不明確 (8) アワタケ (9) オリーブサカズキタケ (10) ウマノタケ (11) キチャハツ

2_ヒイロタケ



3_クズの葉。本来1枚の葉であるものが変化して3枚の葉に分かれた複葉。



43_ヤブニッケイ。口に入れるとニッキの香がする。



5_クスノキにびったり絡んで伸びるエノキは、アサ科の落葉高木。丘の上のクスノキと桜の横には杭が打たれており、桜樹されたことを示す。





6



6_丘で唯一のネムノキの巨木。
マメ科の落葉高木（陽樹）。花
が咲いていた。



京都芸大沓掛キャンパス造成以前、この丘は日常のよい明るい環境だったらしい。一部に残る陽樹のコナラやネムノキがそれを示す。その後、シラカシなどが勢いをまして、陰樹林になったという。

左：国土地理院の空中写真（1975年1月）から。
赤の点線が芸大敷地。

豊かな学びの場 “つちのいえ”の 森にみた時の流れ

徳岡駒子

現代生物学 2009-2018年度
非常勤講師

専門分野：自然環境教育・菌類
(きのこ)生態学

当プロジェクト参加テーマ：
植物観察会「植生地理学から
読み解く丘の現状」2015年

* p.180

“つちのいえ”周辺は白樫[しらかし]の森になっている。大きな白樫の下には若い白樫がいくつも成長して、森の奥深くまで茂っている。落ちたどんぐりが、自然に成長して森となったようだ。一方、東西にのびる遊歩道の脇には、日なたで勢いよく伸びる唐楓[とうかえで]、榎[えのき]、野薔薇[のいばら]、葛[くず]、藤[ふじ]などが光を争っていた。これら植物は、鳥や風によって運ばれてきた種子が発芽したのだろう。

雨季の“つちのいえ”の森では、落ち葉や枯れ枝から小～中型のきのこがたくさん発生した。特に2015年の植物観察会では、学生が予想を超えて多種類のきのこを集めてきたことに驚いた。

同年初夏、比較的若い1本の白樫がツリーテラスの制作のために剪定された。その3年後、古い大木の白樫が台風21号で根元から倒れたが*、テラスの白樫はきれいに残った。自然の森は、弱った木が台風などの影響のため倒れて更新する。この森は、自然の影響だけではなく、学習活動を目的とした人為的な活動によっても、変化してゆく。その歴史を記録するには短すぎる期間となったことが残念だ。

変化する森がつくる複雑な環境には、空間それぞれに適応した生物が入り込む。剪定や踏みつけなどの人為もまた、大きな自然の森では生物の多様性をつくる。この多様な環境によって、学生の様々な視点と気づきが担保され、作品に個性をもたらす。一方で、身近な自然を活用するには協力者や教材などの準備に時間がかかる場合が多い。このプロジェクトで印象的なことは、インターネットによって人と情報が容易に繋がり、かつては難しかった豊かな学びが身近になってきたことだ。